# 明治大学学費闘争前進のために

＜下＞

宮岸敬

今回の明大学費闘争の経過は、正しい政治部隊の必要性とその指導性を明確に問うている。——その中で一貫して貫かれているものは、二つの日和見主義との闘いである。ここに活動の経過を踏まえて、具体的かつ明確にわれわれの方針を明らかにし、闘いの前進に寄与したい。

## 事前協議制の獲得

明大学費闘争において特徴的なことは、理事会側の値上げ決定うんぬん以前に、いわば先制的に闘いが開始されたことである。

昨年の六、七月段階において、民主主義学生同盟の呼びかけを中心に、理事会、評議員会に対する闘いが独自に組織された。これが大衆的な闘いへの足場を築き、七月二日、理事会との間に、学費値上げ決定以前に学生と話し合う、その場合値上げ撤回もありうる、という「七・二協約」事前協議制が勝ち取られたのである。

理事会はすぐさま、これを無視有名無実化し、最後には破棄する方向をとった。ところが中執一部指導部（社学同統一ブンド）もこれを全く無視し、その積極的意義さえ何ら明らかにできなかった。代々木派の諸君は、未だ闘いの部隊に登場せず、「いうに及ばず」という情勢であった。

## 大学側の事前工作

理事会は事実上「七・二協約」を無視し、学費値上げを前提に、夏期休暇以後、着々と準備工作を進めた。ひそかに教職員に対する値上げ説明会を次々と準備し、「明治大学の財政状況」というパンフレットを全教職員、父兄に配るなどを行なった。

これらの事態に対し十月十二日、理事会との大衆団交を要求、三千人の学生が結集。理事会の専断、分裂工作、さらには買手のつきもしないへんぴな信濃学寮買収事件、理事会も教授会も審議しないままに進んでいた札幌大学建設問題、学生執行委員に対する買収事件等、一連の〝明大版黒い霧〟が暴露され、学生の怒りが急速に高まりつつあった。このような中で、問題は盛り上りつつある学生の意識をいかに大衆的に組織するかという時点に立った。

## 代々木のデマと無節操

十一月十八日、値上げ発表前の先制ストとして、スト権を確立すべく学生大会が開かれた。中執指導部（社学同統一ブンド）は「帝国主義の末端支配、学費値上実力阻止」を叫ぶのみで、彼らのデッチあげた無責任極まる〝全学闘争委員会〟を提起した。

民主主義学生同盟は、これに対し「大衆的民主的闘争委員会を勝ち取ろう」のスローガンのもとに全学闘および地区闘の全面改組を要求、クラスを基礎とする闘争委員会体制を対案として提出し、学生大会での確認を勝ち取った。学生大会はそのもとにスト権を確立し、和泉地区（教養課程）が十一月二十四日よりストに突入した。

民青及び代々木派諸君は、驚くべきことに、体育会内一部の右翼と共に、スト反対投票を行なった。彼らはこれ以後、闘いには何ら寄与せず、せいぜいサークルにとじこもっていった。『赤旗』二月二十日号で、中原久雄なる筆者は、「民学同」が「もり上る闘争に水をかける役割を果たしています」と書いているが、このことだけでも、いかに代々木派はデマと無節操、ご都合主義に走っているか明らかである。闘いに参加した学友は自らの眼でもって判断している。

## 方針も無いまま団交

十一月二十六日、連合教授会が開かれ、ここに理事会は学費値上げA・B案を提示した。二十八日生田地区（工・農学部）スト突入民学同はすぐさま「理事会案反対評議会通過阻止、大衆団交要求」決議を集約し、全学的に意志統一すべく、そして闘争体制を全面的に再編成すべく、全学総決起大会を提起した。三十日、ストを背景に一万人余の参加のもとに理事会との大衆団交が勝ち取られた。

団交では理事会は、値上げを決定するかどうかについてさえ自らの意思の統一が全くないことをさらけ出し、教育経営の根本方針を問われると何も答えられない、といった状態であった。これによって理事会の全くの堕落ぶりと無責任極まる態度が、参加したほとんどの学生の強い反撥と憤激を高まらせた。

ところが、中執指導部はいやが上にも高まった学生大衆の意識を何ら有効に方向づけることなく、自らの自己満足的発言のあと、少数のデモに学生をかりたて、バリケード作りだけに終らせた。そして彼らは無責任にも団交席上、「学生への還元があれば一万や二万円値上げは良い」と発言し、「実力阻止、バリケード死守」以外に何ら方針を出せなかった彼らの無方針と物取り主義を明らかにした。

この一一・三〇大衆団交は「七・二協約」を無視し、かつその存在に障害を感じながら、一方的に強行しようとする理事会、無責任極まる理事会に対し、彼らの値上げ審議、決定過程そのものへの学生の介入を勝ち取らなければならないことを明らかにした。この時点においては、値上げ決定そのものの待機主義はもはや許されなかったのである。

民学同は、この時点に至って、「七・二事前協議制」を大衆的認識として定着させ、学費問題審議決定過程そのものへの学生の発言権、介入権を勝ち取るべく、理事、教授、学生の三者協議機関としての全学協議会の復活、設置を主張し、大々的な宣伝戦を開始した。それは当然、先制的闘いとして値上げA・B案の発表を含め、値上げ正式発表に至る時点での運動展開の中心点となるべきであった。

## 少数ストへの進行

十二月段階に至って民学同は「評議会通過阻止、全学協設置、大衆団交要求」を前面に押し出した。十二月六日評議会が行なわれようとした。全学闘一部指導部は、理事が「機動隊が来ている」と発言するや、「とにかく引あげよう」という態度をとった。民学同はすぐさま大衆的圧力のもとに評議会の流会を勝ち取り、その場で理事会との大衆団交設定を確約。

しかしながら、全学闘一部指導部は理事会が大衆団交を拒否するや自らもそれに同調し、全くの少数ストへと転換していった。この中で「昭和維新会」「全明有志会議」等の右翼が台頭し、十二月十五日早朝右翼のなぐり込みへと進展した。この夜に理事会は値上げを正式発表した。

社学同統一ブンドはこの時点に来て全く闘いを放棄し、彼らのセクト的「反帝全学連」結成にのみ終始した。こうして冬休みに入り〈上〉で述べた「闘いの現状」へと進展した。

## 二つの日和見主義

この学費闘争において、中執を中心に、最も重要な立場にありながら、誤まりを重ねてきた社学同統一ブンドおよびそれに付和雷同するトロツキスト諸派の特徴が非常に明らかになった。

彼らは最初は広範な学友の自然発生的なエネルギーにあぐらをかき、次に闘いの進展に対する自らの無方針を極左冒険主義でカバーし、大衆が遊離すると、大衆不信に基づく無政府主義的盲動へと走り、ついにはその必然的裏返しとして、無責任な闘争放棄へと進んでいったのである。

次に、代々木派および民青の諸君は、闘いの盛り上りに恐怖心をいだき、右翼と共にスト反対にまわり、現場での闘いは完全に放棄して、せいぜいサークルにとじこもり、そしておもむろに「物価値上げ反対、総選挙勝利、諸要求貫徹」を叫び出し、ときに「ヒモのつかない国庫補助」を主張してきたのであった。大衆不在のもとでの〝自治会かすめとり〟のみをねらい、不満をのべあう「仲間サークル」への転落に対し、多くの同盟員は疑問と反対の意思を表明せざるをえなくなっている。

われわれは、ここに典型的な二つの日和見主義に対し、明確に自らの具体的政策を対置し、学費闘争を大学の民主的改革の展望のもとに、そしてその全国的共同闘争をめざして、真に民主的戦闘的に闘っていくために努力を続けている。（おわり）